

## 地方選挙での応援演説

大橋 松行

2018年7月15日、連日35度を超す酷暑の中、長浜市議会議員選挙が告示され、22日の投開票に向けて熱い戦いが繰り広げられた。今回の選挙には、定数26のところ、現職・元職・新人あわせて29人が立候補した。政党別で見れば、共産党4人、公明党1人、無所属24人である。地方都市での議員選挙では、一般に政党公認が少なく、いわゆる「無所属政治」が行われている。長浜市も例外ではないが、無所属候補の中には、特定の政党とつながりを持っている者もいる。長浜市の場合、自民党系保守の無所属候補が多い。また、今回の選挙の特徴は、形の上では「少数激戦」の様相を呈していたが、「泡沫候補」と言われる候補者が3人ほどいたので、実質的には「激戦」ではなく、ある意味「楽な戦い」であったと言えるかもしれない。かといって、どの陣営も手を抜いたわけではないだろう。

さて、今回の選挙で、図らずも私は、地元から出馬した新人候補のI氏を応援することになった。私が住んでいるところは、長浜市の最南端に位置する、人口1,200人余りの農村地域である。戦後、8年前まで1回を除き、地元から市議を必ず送り込んでいた。その後は候補者を立てることもなく、他地域の候補者の「草刈り場」になっていた。2010年の2度目の合併で、長浜市の範囲が大きくなったこと、議員定数が削減されたこと、4年前まで隣接する西黒田学区が議員を輩出していたこと、その上、地元の神田学区の人口が減少し続けたこともあり、地

元から候補者を擁立することは極めて困難な状況になってしまっていた。私の地元の神田学区と隣接する西黒田学区、六荘学区（田村地区）は、南長浜エリアとか長浜南部地域とか呼ばれているが、今回の選挙でI氏が当選して、8年ぶりに3学区・地区の代表を輩出できた。神田学区は他の2つの学区・地区と地続きであり、昔から婚姻等による関係が深い。西黒田学区と田村地区との間にはそのような関係はないので、神田学区が両者をつなぐ鋸のような役割を果たしている。

I氏は、2,000票弱を獲得し、6位で当選した。上位当選だ。ここで、少しI氏のことを紹介しておこう。彼とは同じ町内に住んでいるので、旧知の間柄ではあるが、彼は高校卒業後、長浜市役所に就職、在職しながらS大学短期大学部を卒業、部長職まで上り詰めている。教育委員会、総務部、議会事務局などで要職についていたので、行政経験が豊かで市政や議会に精通している。退職後は、まちづくりセンター所長や地区社会福祉協議会理事、土地改良区総代、農業協同組合総代などを勤め、地域社会や地域福祉や農業情勢にも明るい。通常、行政経験がない議員は行政の仕組みや内容等に精通していないので、1期目はその学習に多くの時間を充てることになる（そのようなプロセスを全く無視する議員もいるであろうが）。しかし、彼の場合は、その必要が全くない。その意味で、彼は新人ではあるが、まさに即戦力なのである。

彼は、「人が輝き 地域も生き活き！」と銘打っ

たパンフレットで、「暮らし安心」「地域を活かす」「働くパパ・ママの子育て支援」「新たな産業創出と企業誘致」「南長浜エリアの魅力ある地域再生」の5つの公約を掲げている。特に彼が強調していたのが、5番目の公約である。長浜南部地域の再生・活性化は、この地域に住む人びとにとっても、最も関心の高い地域課題である。既に、数年前に神田学区、西黒田学区、田村地区有志によって南長浜地域まちづくりを考える会が立ち上げられ、「長浜南学区街づくり計画の骨格」が策定されている。その核として、神田学区にスマートインターチェンジを建設することも検討されている。この件に関しては住民の間に賛否両論があるので、有権者の前で、彼自身はそのことに一切触れることはなかった。

前置きが長くなったが、個人演説会での応援演説のことについて述べておこう。個人演説会は、選挙期間中10回行われた。演説会場については、次のようなローテーションが組まれていた。告示日には、今回選挙で最も早くI氏支援を打ち出した田村地区で行われた。その後は、3日連続西黒田学区の6地区、続いて六荘学区、I氏の妻の実家があるK学区H地区、そして最後に地元神田学区で総決起集会が行われた。H地区以外は、全て長浜南部地域だ。

どの演説会場周辺にもI氏陣営のシンボルである緑ののぼり旗が林立していた。I氏の説明によれば、緑色は田園を意味し、それは農村地域である長浜南部地域を意味してもいるということであった。会場内には正面に国会議員、県議会議員、市長の為書が張られ、周囲には候補者本人の選挙ポスターが張り巡らされていた。各会場には、I氏陣営の運動員が10人ほど配置され、会場設営や駐車場で車の誘導などを行うとともに、神田学区の支持者が「さくら」として数十名単位で動員されてもいた。

応援演説は1カ所目は19:00から、2カ所目は、19:30からとなっていた。1日に2カ所

で行う場合は、出来るだけ移動時間を取られないように隣接する地区で行った。1カ所目で演説が終わったら、即座に運動員の車で次の会場に移動だ。応援演説に充てられる時間は各会場30分、応援弁士は、3~5人であった。選挙参謀からは、1人の持ち時間は5~7分と指示されていたが、応援弁士の数はほぼ毎回予定と異なった。国会議員が急遽東京から応援に駆けつけたり、地元の有力者が飛び入りで演説を行ったりして、応援の時間も順番も臨機応変に変更された。応援弁士は、全員「必勝」と書かれた日の丸の鉢巻きを締めて、応援演説を行った。もちろん、I氏本人も陣営の運動員も同じ鉢巻きを締めている。私自身は、第二次世界大戦時の特攻隊のイメージがして、このようなスタイルを好まないが、締めてみると不思議とキリッと気が引き締まるような感じがした。会場に来ている有権者に、こちらの思いや熱意が伝わる気がした。それぞれの応援弁士が、思い思いに支援を訴えている。熱弁をふるっている弁士もいれば、静かな口調で支援を訴えている弁士もいる。

私は、2学区・2地区の5会場で応援演説を行った。地元神田学区以外での演説の構成は、「挨拶」「長浜市の課題」「地域課題の解決を誰に託すのか」とした。神田学区は、選挙最終日の総決起集会となっていたので、「挨拶」「選挙の総括」「最後のお願い」とした。応援演説の内容は、それぞれの学区・地区の実情に合わせて変えた。その結果、4通りの原稿を用意することになった。どの会場での応援演説でも、私は主に次のような点に心掛けた。1点目は、演説会場が設定されている学区・地区が抱えている独自の課題に必ず触れること。2点目は、一方的にお願いするのではなく、「私はこう思いますが、皆さん方はどうでしょうか」とか、「○○しようではありませんか」というように、語りかけるような、そして同意・同調を求めるような口調で話すこと。3点目は、演説の内容は、I氏の掲げている政策と整合性をもたせつつも、より具

体的で日常的な事例を取り上げて、皮膚感覚で理解できるようなものにする。

まず、「挨拶」から具体的に見ていこう。冒頭、自己紹介をし、猛暑の中、多用の中、お疲れの中、個人演説会に来ていただいたことに対してお礼を述べた後、自分は「長浜市民の一人として、とりわけ長浜南部地域の住民の一人として」(H地区では、「I氏の推薦人の一人として」)、I氏を「私たちの代表として」(H地区では、「皆さん方の代表として、私たちの代表として」)、長浜市議会に送っていただきたくお願いに来たことを話した。ここで私が特に気を使ったことは、この場では来場者が「主人公」であるとの認識を示すことだった。間違っても、こちらが「上に立っている」とか「対等の立場にいる」とか思われなかった。

一通りの「挨拶」が終わると、次は「長浜市の課題」に入った。課題は多くを述べず、「人口減少・少子高齢化」の1点に絞った。多くの地域課題の根源が、ここにあるとの理解が私にはあったからだ。この現象は、全国的な傾向であり、滋賀県も既に人口減少局面に入っていること、そして、長浜市も人口減少と少子高齢化が急速に進んでいることを述べ、特に神田学区はそれが著しいことを数字を示して話した。それを受けて、「皆さんがお住まいの学区・地区はどうでしょうか」と話を続けた。その際、私は、「子どもの数が減少し、独居老人の世帯が増えてきてはいないでしょうか。空き家や空き地の数は増えてきてはいないでしょうか。神社の春祭りや秋祭りはどうでしょうか。若い人たちは祭りにどのくらい参加しておられますでしょうか。地藏盆はどうでしょうか。子どもの地藏盆というよりは、大人の地藏盆になってはいないでしょうか。『墓じまい』という言葉もよく耳にしますが、ご先祖様がおられるお墓はどうでしょうか」と、現地の人びとが日常生活の中で体験している身近な事例を取り上げて、自分たちが置かれている現状を認識してもらうことを

心掛けた。そして、このまま何もせず、手をこまねいていれば、いずれ限界集落へ移行することになり、将来的に地元だけでは解決できない地域課題が発生する可能性があることを話した。ここでの狙いは、「人口減少・少子高齢化」およびそれによって発生する地域課題は、各学区・地区共通の現象であり課題であることを「共有」することにあった。

そこで、「地域課題の解決を誰に託すのか」ということになる。私は、地元だけでは解決できない課題については、行政の手を借りて解決するのも一つの有効な方法であることを提示し、次のように述べた。「長浜南部地域から私たちの代表を議会に送り込み、私たちの思いを議会に反映させることによって行政施策として実現を図ることが、現実的な対応ではないかと思いますが、いかがでしょうか。ここ数年、西黒田学区および神田学区からは議員は1人も輩出されていません。完全に『草刈り場』になってしまっています。皆さん、それでいいのでしょうか。決して、よくはないはずですが。私は、地方議員は自治体全体の代表であるとともに、地域の代表であるとも思っています。今回の選挙で私たちの代表を輩出し、『草刈り場』という汚名を返上しようではありませんか」。ここでは、両学区とも、現在は議員を輩出していないため、「草刈り場」状態にあり、このような状態を脱するためには、厳しい現実と直面し、地域課題を共有する両学区が緊密に連携して、I氏を長浜南部地域「共同」の「地元代表」として議会に送り込むことが必要ではないのか、ということを強調した。

また、田村地区は、六荘学区の南部に位置しており、同学区からは既に議員を輩出しているので、次のように述べた。「私は、現実的な対応として、長浜南部地域から私たちの代表をできるだけ多く議会に送り込み、私たちの思いを議会に反映させることによって行政施策として実現を図ることを提唱したいと思います。そ

うはいうものの、現実には南部地域出身の議員は1人しかおられません。私は、政治の世界においては、『数は力である』とも思っています。1人よりは2人の方が、地元の思いを議会に反映させやすいと思いますが、いかがでしょうか。六荘学区からは、現職のN氏が三選目指して立候補している。これまで彼は、六荘学区を地盤としながらも、「草刈り場」になっていた西黒田・神田両学区からも得票を積み重ね、上位当選してきた。

H地区は、旧長浜市の東に位置するところだ。ここは、I氏の妻の実家があるところであり、今回の選挙ではH地区のあるK学区から候補者は出なかった。そこで私は、次のように述べた。「本来ならば、K学区から代表を議会に送り込み、皆さん方の思いを議会に反映させることによって行政施策として実現を図ることが、現実的な対応ではないのかと思うのですが、残念ながら今回の選挙では、K学区からどなたも立候補されていないとお聞きしております。それでは、これまでの神田学区がそうであったように、他地域の候補の『草刈り場』になってしまいます。皆さん、それでいいのでしょうか。決して、よくはないはずです。私は、地方議員は自治体全体の代表であるとともに、地域の代表であるとも思っています。ご当地は、I氏にとって『第二の地元』です。彼を皆さん方の代表としても是非とも議会に押し上げていただき、H地区は決して『草刈り場』ではないのだということ、知らしめようではありませんか。ここでは、H地区はI氏にとって「第二の地元」であることを強調することによって、I氏がH地区の人びとにとっても「地元候補」であるという認識を持ってもらうことを意識した。

では、どのような人物が私たちの代表として相応しいのか、ということになるが、私は次の

ように述べた。「私たちの代表は、単に『出たい人』ではなく、『出したい人』であり、『出てもらわなければならない人』であると思います。それは、どのような人なのか。『住民に寄り添って、話しの聞ける人』、『価値観を共有できる人』、『自分の頭で考え、判断でき、行動できる人』、『行政経験が豊かで、しかも責任感と情熱を持った人』、こういう人こそ、私たちの代表にふさわしい人ではないでしょうか。ここでは、マックス・ヴェーバーが『職業としての政治』という著書の中で指摘した、政治家にとって特に重要な3つの資質、すなわち「情熱」「責任感」「判断力」を盛り込むことが、私の頭にはあった。それを、I氏の人間性とリンクさせながら、彼が政治家として「最適任者」であることを訴えたのである。

最後は、彼への投票のお願いだ。「皆さん、いかがでしょうか。このような資質を持ち合わせているI氏に、一度私たちの思いを託してみようではありませんか。一票を彼に託してみようではありませんか。22日の投票日に都合のつかない方は、是非とも期日前投票をお願いします。毎日が投票日なんです。I氏を信頼し、一緒に思いを託してみましょ。最後の最後まで、皆さん方と連携を取り合って、この選挙戦を戦い抜き、22日にはともに喜びを分かち合いましょ」。ここでも単なる「お願い」ではなく、思いを同じくするものの視点に立って、呼びかけるような口調で訴えた。

私の応援演説が、どれだけI氏の選挙結果に影響したのかはわからないが、上位当選という結果をもって7日間の熱い戦いに幕が下りた。

(おおはし まつゆき  
滋賀県立大学名誉教授)